演題　7

乳腺 spindle cell carcinoma の一例

くまもと森都総合病院　病理診断科

木下　裕也（MT）　内田　衣里子（CT）　溝上　美江（CT）

遠山　亮佐（CT）　有馬　信之（MD）

【はじめに】

乳腺 spindle cell carcinoma は紡垂形細胞肉腫との鑑別を要する上皮性腫瘍で，発生頻度は全乳癌の 0.08～0.72％と極めて稀である．今回我々は，腫瘍全体が紡錘形細胞で構成された乳腺 spindle cell carcinoma の１例を経験したので報告する．

【症例】

患者：70 歳代　女性.

主訴：左乳房のしこり.

現病歴：1 ヶ月前より左乳房にしこりを自覚．超音波検査にて左Ｃ領域に約 30×20㎜ 大の後方エコー増強を示す境界明瞭粗造の低エコー腫瘤を認めた．穿刺吸引細胞診で悪性と確定診断できず，針生検による組織診にて悪性と診断し，左乳房切除術が施行された.

【MRI 所見】

左乳房Ｃ領域に T2 強調像にて 33×27㎜ 大の境界明瞭な類円形腫瘤を認めた．辺縁に拡散制限があり，dynamic では辺縁部に早期増強を認めた．境界明瞭で圧排性発育を示しており，充実腺管癌あるいは粘液癌が疑われた.

【細胞所見】

細胞量は多く，紡錐形または多稜形異型細胞が孤立散在性に，もしくは束状あるいは不規則集塊を形成し出現していた．異型細胞の核は紡錘形～類円形で，大小不同と核形不整を示し，細顆粒状のクロマチンの増加と１～数個の明瞭な核小体を認めた．細胞質はライトグリーンに好染し，辺縁は明瞭であった．また周囲に数個から 20 個の核を有する多核巨細胞を多数認めた．以上の所見より，悪性を疑ったが，細胞の由来が明らかでないため，悪性の疑いと判定した.

【摘出腫瘍肉眼所見】

最大径 31mm の灰白色充実状腫瘍で，周囲との境界は明瞭であった.

【組織所見】

腫瘍は類円形～細長い核を有する紡錘形異型細胞の密な束状配列からなり，錯綜配列や herringbone pattern がみられた．異型細胞の核は腫大と大小不同，核形不整を示し，１～数個の核小体を有し，核分裂像が高頻度であった．腫瘍間質にはリンパ球，形質細胞，多核巨細胞浸潤と膠原線維の増生があり，腫瘍内に既存の乳管を散見した．腫瘍は主に周囲へ膨張性発育を示していたが，浸潤性発育を示す部も認めた．免疫染色では腫瘍細胞は CAM5.2，p63，vimentin に陽性を示し，spindle cell carcinoma と診断した．なお，ER，PgR，HER-2 は全て陰性であった.

【考察ならびにまとめ】

乳腺 spindle cell carcinoma は乳癌取扱い規約第 17 版では浸潤癌の特殊型に分類され，紡錘形細胞からなり，肉腫様にみえるが，一部に上皮性性格の明らかな癌細胞巣や扁平上皮化生を示す部分がみられることが多いと記載されている．一方，WHO 分類では metaplastic carcinoma の亜型に分類されている．metaplastic carcinoma の多くは triple negative cancer で，リンパ節転移の頻度は低いが，脳や肺などへの遠隔転移を来たすことが知られている．しばしば紡錘形細胞肉腫との鑑別を要すが，診断には腫瘍細胞の上皮細胞への分化を証明することと，腫瘍の一部に DCIS の成分をみつけることが肝要と言われている．本症例では DCIS の成分をみつけることは出来なかったが，種々の cytokeratin 抗体を用いた免疫染色による上皮細胞の幅広い screening により陽性所見が得られ，診断におけるその重要性が示唆された.